

[担当教員]

安田徹也(准教授) 山口秀文(講師) 後藤沙羅(助教)

[Teaching Assistant]

金谷百音(A72) 神前由佳(A72) 松下敦紀(A72)

■課題概要

2019年から2023年にかけて世界はCOVID-19パンデミックに見舞われた。感染対策として人と人の直接の接触を減らすことが世界規模で取り組まれ、それに伴い映像での遠隔コミュニケーションツールが急速に普及した。今やZoomやTeamsでの会議は日常の一部である。これには以前から始まっていた「働き方改革」を加速したというプラスの面もあるだろう。しかしそうした遠隔コミュニケーションには「なにか大事なものが」欠落している感も否めない。そもそも社会活動のエッセンシャル(基底的・本質的)な部分には「遠隔」自体が及び得ないことも、改めて認識されたと思われる。実際に現二年生を中心とする諸君も、これらのことを具体的に、かつ痛みを伴って経験してきたことと推察する。以上の状況を踏まえた、直接的な対人の形態、いわば“つながり方”の、新しい様式(スタイル)の探究が社会的な課題となっている。そこで本演習の課題は新しいつながり方を可能とするワーク・スペースの構想・設計を求めるものである。いつ、どこで、どのように、そして誰と、誰とつながって、はたらくのか?そこでのエッセンシャルなものとは何なのか?それらを充足する“つながり方”の様式(スタイル)とはどのようなものか?このような問いを念頭において、はたらく場所そのものの意味・在り様を改めて考察し、新しいワーク・スペースを想像力豊かに構想してほしい。更に提案には、建物を所有する企業だけでなく、社外の地域社会とのつながりを生む空間を含めるものとする。周辺環境を踏まえた上で「いつ、どこで、どのように、“誰と” “誰とつながって” はたらくのか?」という問いに対する答えを提示してほしい。そしてもちろん、実際に建設され、使われる建築物としてのリアリティを備えた設計とすることが第一義である。

■オフィス・ビルの概要：どのようなはたらき方をする建物か

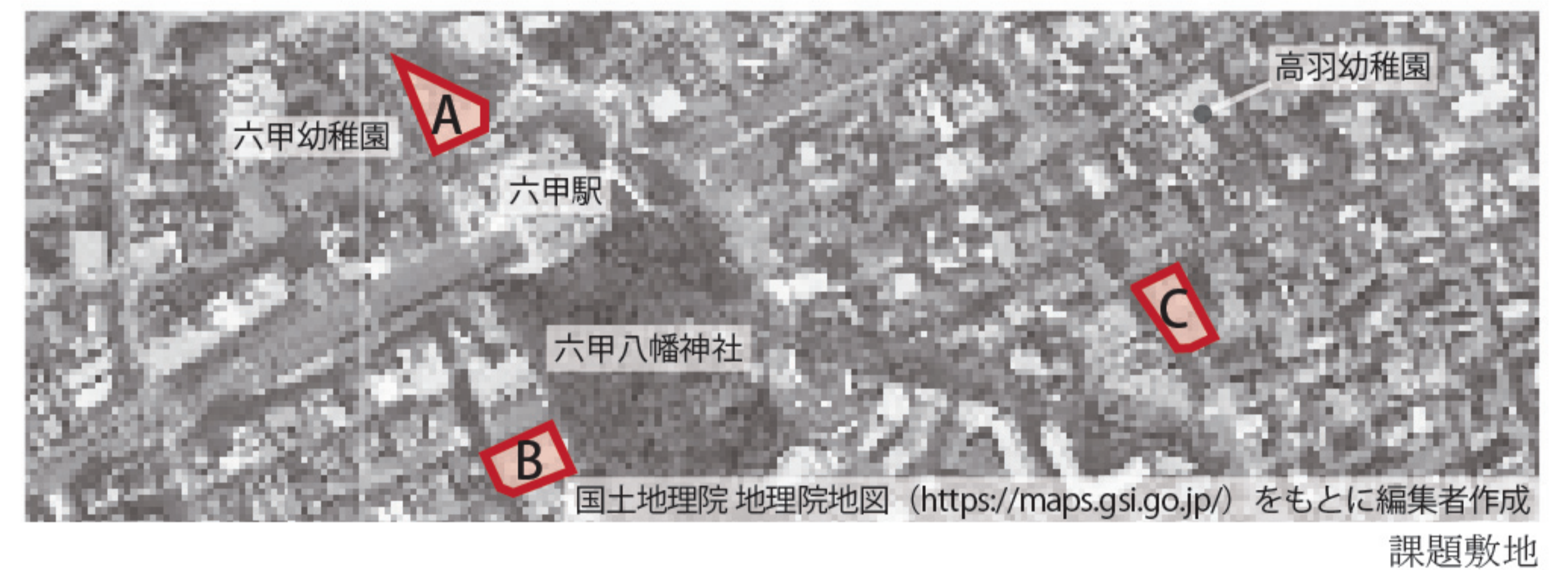
- ・業種・業態の設定：自由に、かつ具体的に想定すること。
- ・就業者数の想定：常時50~60人程度が執務するものとする。
- ・業務部門の構成などは業種・業態から適切な想定をすること。
- ・業種・業態を活かす建物のあり方を自分の設定にあわせて考える。

■敷地

- ・阪急六甲駅周辺の三か所(A,B,C)の敷地から一つの敷地を各自選ぶ。
- ・敷地面積はいずれも約600㎡(20×30m)程度である。
- ・敷地内の高低差は現状の地形を前提とする。
- ・周辺環境などの諸条件は各自の調査に基づいて想定してよい。
- ・各敷地の建蔽率は60%、容積率はA:300%、B,C:200%である。

■建築概要

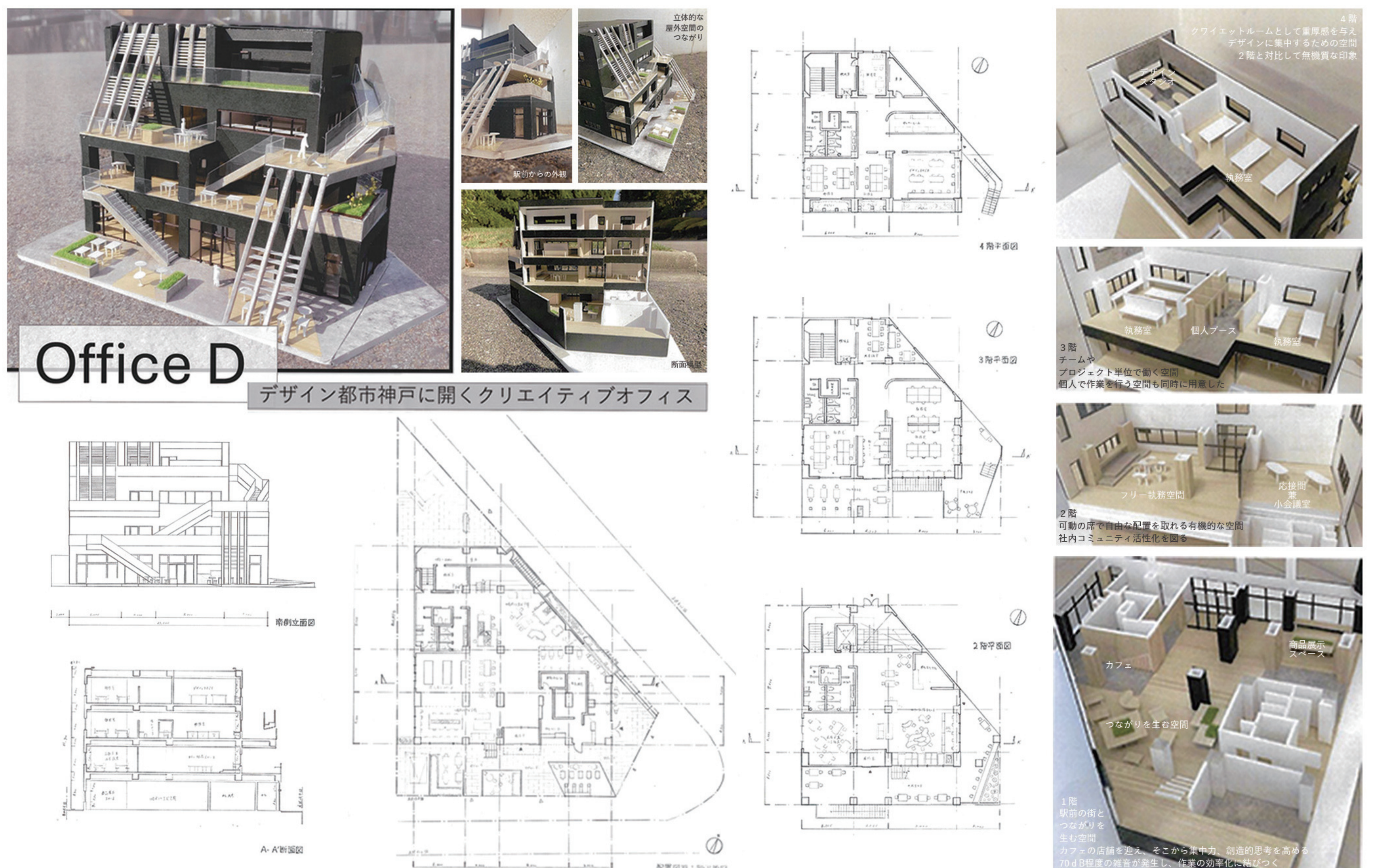
- ・構造規模：鉄筋コンクリート造3~4階建て、ラーメン構造を原則とする。
- ・延べ面積：1,000~1,200㎡
- ・管理用出入口やバックヤードに連絡しやすい場所に自社や配送業者などが一次的に使用する駐車スペース2台分を確保すること。



Office D — デザイン都市神戸に開くクリエイティブオフィス—

鹿内翔

駅前空間に大きく開いた作業場として事務所を展開する。敷地の特徴を生かし、1階と屋外空間を街の作業の場として開き駅前との繋がりを生み出す。南側の駅から見上げた際のヴォリュームを減らすように計画。減らしたボリューム部分に屋外空間を設け、駅前空間にひらきながらもデザインの間としての領域性を主張させる。

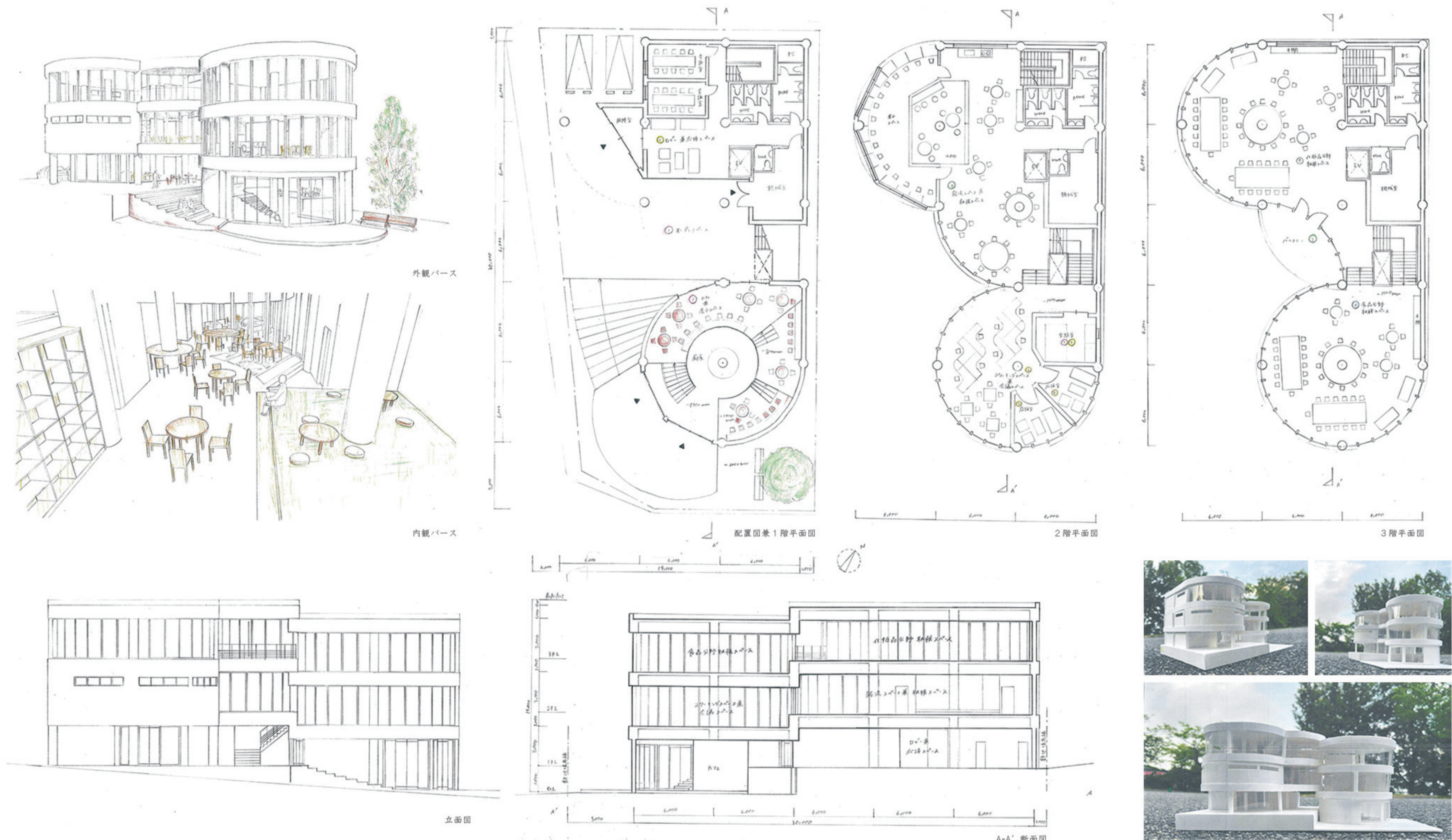


つながりが生む化学反応

市原佳純

化学メーカーの商品企画部門のために設計されたこのオフィスは、地域の人々、他企業の人々、企業の他分野の人々、そして同じ分野の人々とつながることで、新たなアイデアを得る（＝化学反応を生む）場となる。また、普段化学と関わることのない人々は、化学が身近なものであると感じるきっかけをつくる。

つながりが生む化学反応



街と惹かれ合う

山本奈奈

地域に寄り添い、惣菜や宅配弁当を販売する企業の事務所を計画する。阪急六甲駅を介して移動する人々や観光客が思わず立ち寄りたくなるような空間、また事務所として繋がりや安らぎを両立できる空間づくりを目指した。企業は働きやすい空間の中で街のニーズを追及し、街の魅力の一部となる。

街と惹かれ合う

